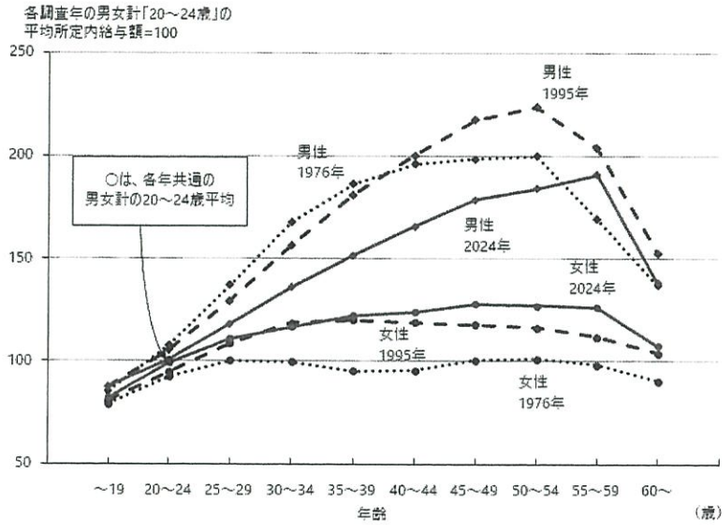
別紙解答用紙に解答すること。

「小論文(論文Ⅰ)」・「小論文(論文Ⅱ)」とも必答

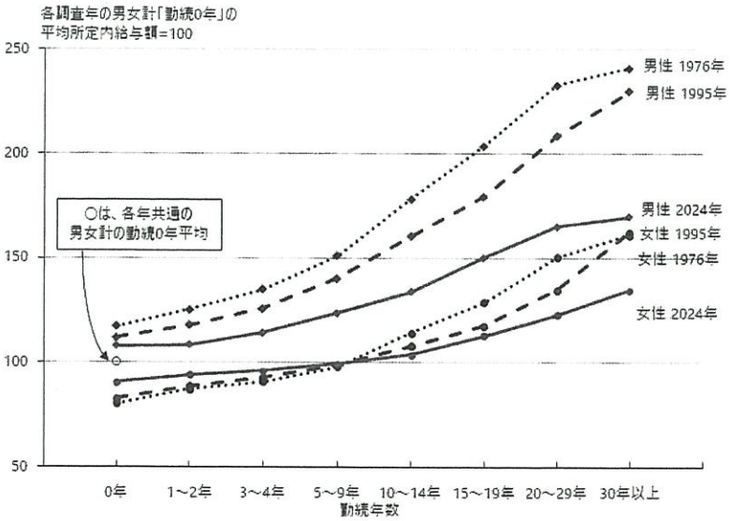
図1～3は、厚生労働省「賃金構造基本統計調査」に基づき作成された、日本の賃金構造を示すグラフである。これらの図をもとに問1～3に答えなさい。なお、「一般労働者」とは、「短時間労働者」以外の労働者を指し、「所定内給与額」とは、きまって支給する現金給与額のうち超過労働給与額を差し引いた額である。

図1　性別、年齢階級による賃金カーブ［1976年、1995年、2024年］（一般労働者、所定内給与額）



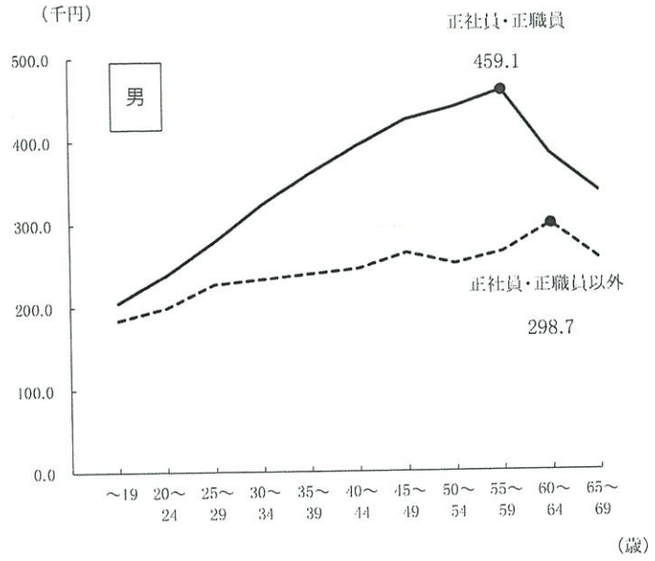
（注1）1976年、1995年、2024年の各調査年での男女計の「20～24歳」の平均所定内給与額を100としたときの各年齢階級の平均所定内給与額をあらわしている。
（注2）19歳以下と60歳以上では調査年により年齢階級区分が異なるため、労働者数ウェイトを用いて区分を統合した値を推計した。
（注3）賃金構造基本統計調査では、令和2（2020）年調査より一部の調査事項や推計方法などが変更されている。

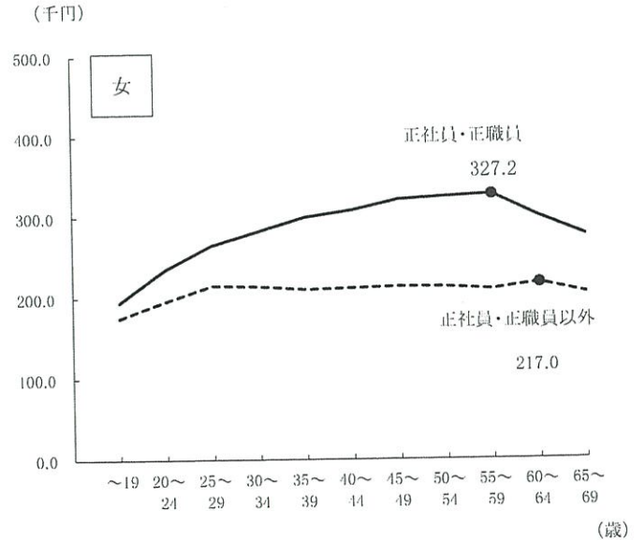
図2　性別、勤続年数階級による賃金カーブ［1976年、1995年、2024年］（一般労働者、所定内給与額）



（注1）1976年、1995年、2024年の各調査年での男女計の「勤続0年」の平均所定内給与額を100としたときの各勤続年数階級の平均所定内給与額をあらわしている。
（注2）「1～2年」「20～29年」では調査年により区分が異なるため、労働者数ウェイトを用いて区分を統合した。
（注3）賃金構造基本統計調査では、令和2（2020）年調査より一部の調査事項や推計方法などが変更されている。

図3　性別、雇用形態、年齢階級による賃金カーブ［2024年］（一般労働者、所定内給与額）





［出典］
図1・図2：労働政策研究・研修機構「早わかり グラフでみる長期労働統計」
図3：厚生労働省「令和6年賃金構造基本統計調査 結果の概況」
（https://www.mhlw.go.jp/toukei/itiran/roudou/chingin/kouzou/z2024/index.html）

別紙解答用紙に解答すること。

問1　図1をもとに、日本の賃金カーブがどのように変化したか、男女別に説明しなさい。

問2　問1で述べた変化が生じた理由を説明しなさい。その際、図2・図3にも必ず言及すること。

問3　賃金構造の変化をふまえて、日本社会が今後整えるべき制度や環境について、自分の考えを述べなさい。

以上

別紙解答用紙に解答すること。

「小論文(論文Ⅰ)」・「小論文(論文Ⅱ)」とも必答

次の文章を読んで、問いに答えなさい。

スポーツなど、いわば気晴らしの娯楽であり、楽しめばいいのであって、ことあらたまって理論的に論ずるような主題ではない、と思われる方が多いだろう。それはたしかに一面の真理である。しかしそうだろうか。もともと「スポーツ」(SPORTS) という英語が余暇の利用を意味していたように、イギリスの支配階級で余暇が生まれてきた歴史だけをとりだしても論じるにたる主題である。ある階級で余暇の過ごし方の様式が生じること自体、すでに政治的な社会での出来事だったからである。ほとんどの国では英語のままスポーツという語を使っている。これは英語のスポーツという言葉であらわされる、ゲーム成立過程で内面化されたさまざまな意味合い (コノテーション) をもった適当な言葉がない土地に、それに相当する現象が生じたことを意味している。現在行われている国際的なスポーツの大半はイギリスに起源をもつものか、そこから二次的に派生してきたものが多い。

今になるとはっきりしてきたが、長年、スポーツにおいて普遍的な価値をもつと思われてきたアマチュアリズムなる美徳にしても、①スポーツを生みだしたイギリスの特権的なジェントルマン固有のイデオロギーであり、感情であった。つまり歴史のある時期に支配的な感情以上のものではなかったのである。しかしこのイデオロギーはその後のスポーツに「理想」として受け継がれ、十九世紀の終わりにイギリスからこの理想を学んだフランス人のピエール・ド・クーベルタンが近代オリンピックを創始しようと思ったとき、アマチェア・スポーツにかんするイデオロギーは良くも悪しくも充分に出そろっていた。

(中略)

たしかにスポーツは身体の激しい活動による、個人または集団の間の競争である。選手は多かれ少なかれ身体のトレーニングの苦しみや試合を遂行する試練を経て、勝利か敗北の感情を味わっている。だが野球とかサッカーに集まる大観衆はなんだろうか。観客はただの傍観者、勝敗にエキサイトして騒いでいるだけではないか、という人もいるだろう。なぜ、人はスポーツを観るのか？という設問は一見したところでは、なされてしかるべきもののように見えるが、②実は設問自体が間違っているのである。「スポーツ」なる概念はプレイヤーが技を競い、百分の一秒の差異を争う競技だけではないのである。もともとスポーツという概念は、発生の時から観客を含めた社会 (社交) のなかで成立してきたのである。たしかにスペクタクルなスポーツは、プレイヤーと観客を分離した。さらに一般の人びとが日常、実践するスポーツも発生した。だがスペクタクルなスポーツにおける観客の振る舞いだけをとりだして、どうしてスポーツを見にいくのかなどという問いは愚問でしかないことは明らかであろう。あとで触れるようなサッカー・フーリガン (競技場の内外で暴徒化する観客) の存在は、社会とスポーツとの、ある種の屈折をともなった関係として問わねばならない。しかし観客の傍観的かつ群集的態度へ疑問を投げかけるのは正確さを欠いている。観客として味わうエキサイトメントに、スポーツの社会的、文化的本質が含まれているのである。

(中略)

かつてのアマチュアリズムは、③現在のようにスポーツが完全に社会のあらゆる階層のすみずみまで普及し、教育、産業、政治などと結びつくようになるとき、当然のことだが持ちこたえられない。この変容はもはやイギリスでの発生から説明することはできない。現代スポーツの特色を考えるにも、アメリカの存在は大きなステップであったのである。スポーツ

両面印刷

のアメリカナイゼーション、簡単に言うと大衆化はスポーツの第二の段階をかたちづくるのである。選手はプロ化し、その力量に応じた莫大な報酬を得ても当然な時代がやってきた。このことをかつては聖域であったスポーツが崩壊したと嘆いても意味はない。階層的な社会での余暇の利用であったからこそ、アマチュアリズム礼賛が醸成されていた歴史があったにすぎないのである。

『スポーツを考える』多木浩二（p.8-12）より一部改変して抜粋した。

問１：「スポーツを生みだしたイギリス」（下線部①）とあるが、スポーツはなぜイギリスで生まれたのか、「階級」という言葉を必ず用いて説明しなさい。

問２：筆者は「実は設問自体が間違っているのである」（下線部②）というが、それはどういうことか、本文に即してまた「社会的」という言葉を必ず用いて説明しなさい。

問３：現在ではスポーツが「…教育、産業、政治などと結びつく」（下線部③）ようになっている。その具体例としてあなたが思いつくものを何かあげて、それに対するあなたの考えを述べなさい。

以上

両面印刷